
奇跡の使い手

清佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇跡の使い手

【コード】

N7594V

【作者名】

清佳

【あらすじ】

ファンタジーです。

トコマ老師と愉快な仲間達のお話です。

ここちよい風が吹く草原にぽつんと細長い塔のような岩山が立っていた。

岩山というべきか、峻峰というべきか、聳然として立つその頂上には、一軒のおんぼろ小屋が建っていた。

麓からは親指程度の大きさでしかないが、さえぎる物のない草原でその小屋はとてもよく見えた。

どんな物好きがそんなところに小屋を建てたのかわからないが、とつともなく高い場所にあるのだけは誰にでもすぐにわかった。

人が住んでいる様子はなく、荒れに荒れ、今にも吹き飛びそうな風情だったので、誰もその小屋がなぜ在るのか、登ってまで確認しようとはしなかった。

事実、誰かがちょっととした気まぐれで登り始めてもすぐに先の長さを思い知り、引き返す程には人を寄せ付けぬ岩山だった。

そんな誰も訪れない小屋の中に動く者が二人。

いまにも崩れてぺしゃんこになりそうな外観とは全く正反対のとても豪華な内装の中で、お気に入りソファに寝そべりながら、おんぼろ小屋の主である端正な顔立ちの白髪の青年が言葉を発した。

「せるちえ君、お客さんだよお」

非常にのんびりとした声をかけつつ、自身は手の届く範囲で何かを探している。

せるちえ君と呼ばれたあどけなさの残る少年は、このあたりでは珍しい黒檀のような肌と、著しく珍しいグレーの髪と瞳を持っていた。

「眼鏡でしたら老師の頭の上です」

そう言いながらちらりと外を見た彼は、綺麗な石蜜を取り出し素手で搾り始めた。

この世界の唯一の食料といってもいいこの石蜜は、少し自然が豊か

なところに行けばどこにでも落ちていている物だ。

小さな子供がお小遣い稼ぎに拾ってくるような代物だが、液体にするのはかなり難しく、そのまま口に入れて舐め続けるのが普通である。

もし液体にしたいのなら、石蜜を分厚い金属で挟み込み、数十人がかりで圧力を加えるか、法術使いをお願いするしかない。

セルチェはそれを一人で用意した。

「あ、いいなあ。僕にもちょうだい」

そう言いながらトコマは、ずるずるとソファーからずり落ちつつホフク前進でテーブルのほうに移動し始めた。

「服が汚れるので立ってください」

表情を変えぬまま、セルチェは石蜜を次々と搾り続けた。本当に服が汚れるとは思っていないのだろう。

そもそもおんぼろ小屋の床は、埃を見つけるのにとつもなく苦勞するほど美しく磨き上げられている。材質もぴかぴかのつるつるで何かの輝石で作られていることは容易に想像がついた。

「けちくさいー。小さな事にこだわると素敵な大人になれないんだよ？」

「老師が良識ある成人男性とは思えないです」

間髪いれずにセルチェが言う。かなり容赦がないのだが、言われたトコマは何が楽しいのかにやにやと笑っている。

「病弱だから立てないんです。げぼげぼ」

わざとらしく咳き込むトコマの肌は白いが病人のようなそれではない。むしろ健康そのものに見える。

”老”師と呼ばれるにはかなり人生経験が不足していると思われる、ただの調子のいい優男にしか見えない。

そんなトコマを一瞥すると、セルチェは無言で石蜜搾りを再開した。

そんな事は当然知らない崖の中腹では、小さな子を背負った女性が殆ど踏み場の無い岩肌へへりつくようにして懸命に上を目指していた。

彼女にもう少し筋力がついていればいとも容易く登れたのだろうが、あいにく彼女は今までそういったものとは無縁の生活を送っていた。ときには足場が崩れ母親と共にまっさかさまになりそうな局面がままあつたのだが背負われた子はすやすやと非常に安らかな寝息をたてていた。

「ほんとにもお！ どーしてこんな辺鄙なところに家なんて建てるわけ！？ 妊婦で乳飲み子を抱えた人間が来るとか考えないのかしら！！」

ぶつぶつとかなり大声で文句をたれながら、腹部のそれほど目立たない自称妊婦の女性は手足を擦り傷だらけにして登り続けていた。身なりを整え、黙っていればかなりの美人であろうがそんな事はおかまいなしだ。もっともそのことに関して何かを言う人間は遙か下かもう少し上にしかいそうにない。この分だと日が暮れるまでには頂上にたどり着くだろう。崖の途中で2日過ごしたが、やれば何とかなるものだと考えながら登り続ける彼女は自分の背負っている子供が身じろぎしたのに気づかなかつた。子供は何もない宙をずっと見つめている。空色の瞳をまんまるにして見つめ続けていたかと思つと、急にそちらに向けて手を差し出した。崖に登るのに懸命な母親はもちろん気付くはずもない。そのまま子供はどんどん手を伸ばし体を宙に向かつて反らせてゆく。

「ま・せるチエ ジエノーゼ」

子供の声を耳にし、やっと重心がおかしいことに気付いた母親が焦って振り向こうとしたのが逆効果だった。

「ルー！！」

背中から子供の重みが消えた。

母親は必死に下を見、子供の痕跡を探したが落ちていく様子はなく、消えてしまったかのようにだった。

なすすべなく虚ろな表情を浮かべていた母親は急に何か気づくと必死の形相で再び崖を登りはじめた。

ところは戻っておんぼろ小家の中。

セルチェの頭の上に小さな子供が乗っていた。

灰色の乗り物から落っこちまいと必死にバランスを取る子供とそしらぬ顔で石蜜を絞り続けるセルチェ。絞り終わると出来るだけバランスを崩さぬように食器棚へ向かう。本人は何事もないかのように振舞っていたが、いくら相手が床に寝転んでいようと違和感がありすぎる。

「せるちえ君、覗き見はいけないって教えたよねえ？」

頭のお子様が落ちそうになったところでしぶしぶセルチェが子供を抱えた。だが、どう扱っていいのかわからず胴のあたりを両手で掴んだまま自分の目の前に持ってくる。抱き方がわからず、お子様と真正面からにらみ合いになっている。

「シャ　ラ・・・ぶう。　シャラえ」

子供はセルチェを凝視したまま何かを言った。

セルチェは相手が何を言いたいのかわからず困った表情を浮かべていた。が、お子様の声を聞いた瞬間のトコマの反応は早く、あんなに嫌がっていたのに床から素早く立ち上がり、手早く手を洗い、食器棚から口の広い容器を取り出しそれに満たした液化された石蜜を子供の目の前に持ってきた。

「はい、ルーちゃん。美味しいよ」

誰が見ても大変感じの良い完璧な笑顔を浮かべつつ子供さんが飲み物を飲むのを手伝っている。どうやらお子様は大変お気に召したらしくものすごい勢いで飲み干していく。

トコマはにこにこしたままおかわりを注ぎ込む。子供は嬉しそうにそれも飲み干すと安心したのかくびくび寝息を立て始めた。無防備さに驚きを隠せないセルチェとは対照的に、寝たのを確認したトコマは毛布を手にもずると今度は玄関の方に移動していく。また

も立つのはやめたらしい。

セルチェは、力加減の解ってきたお子様を抱きなおし、自分の寝室に運ぼうと移動しかけた。

「ああ、そつちじゃなくて僕の方に寝かせてあげて」

普段は完全立入禁止区画なのだが、たしかにこの柔らかい生き物には自分の部屋より上質な敷物のある部屋のほうがいいとセルチェは思った。

セルチェが食器を洗い終え残った飲み物をグラスに移し変えたとき、あばら家の扉がガッツと鳴り誰かが乱暴に走りこんできた。

「きやつア」

直後短い悲鳴と共に思いつきりつる床に滑って丁度トコマの真上に倒れこむ。腹部をかばっていた為、頭突きがもろにトコマの背中に入ったようで、ぐえつという声が聞こえた。

「トコマ老師はどちらにおいでかしら!？」

頭をさすりながら飛び起き様に手近な人間の喉下に鈍色の短刀を突きつけつつ、あばら家に辿りついた侵入者が怒鳴りちらした。

怒り爆発寸前の人物は先ほど崖を登っていた自称妊婦である。

こちらを見ているが、思いつきり真下に当人を敷いているのに気づかないようなのでセルチェは指し示してみた。

「は？ トコマ老師よ! ツア・トコマ! 仮にもツアの称号が付く老師がこんなな若いわけないでしょ! 馬鹿にしないで!! 隠れてないで出てきたらどうなの! 弟子がどうなっても知らないわよ!」

困惑するセルチェをねめつけ、本気だからと怒鳴る彼女に答えたのは下敷きにされているトコマ本人であった。

「痛いですう。なので、できれば背中から降りていただきたいのと、弾みで飛んだ眼鏡を探して貰えませんか? はじめまして奇跡のマルーシャ。私がツア・トコマですよー」

マルーシャと呼ばれた妊婦は一瞬狼狽したがトコマの目の前に刀身

を突きつけなおした。

「私の、子供を、二人とも戻して！ 一人はさつきあなたが攫ってしまつたわ。もう一人は行方知れず。応じてくれなければこのまま刺す」

先ほどの怒気はそのままに言い放つ。

「せるちえ君、とりあえずルー嬢をお連れしてくれないかい？」

目の前に短刀を突きつけられたまま、相変わらずのほほんとした声でトコマが言った。

「はい”なの！？”いいえ”なの！？ 了承なら誓つて頂戴！！”セルチエが奥に向かう。肩をすくめたトコマは、ルーシヤさんの可愛いお子様達をちゃんとルーシヤさんの手元に戻すお手伝いを致しますと私ツア・トコマに誓いますと発言した。

実はこの自分自身に誓うという行為には法術的に全く意味がない。誓いを破ると能力が消えるなどの不幸が訪れるらしいので彼らのような法術使いたちがやっているだけである。破つたと公言する者はまれに現れるが不幸が訪れなかったという噂は流れてこない。自分たちにもよくわからない力を使っている為にそういったことに敏感になっているだけなのかもしれないが破る者はいない・・・といわれている。その程度の効力しかないのだが自分より能力が高いトコマを縛る方法はルーシヤには思いつかなかつた。だが、こうも簡単に捕まつたところを考えるに、この世の誰よりも能力が高いというのは眉唾なのではないかと彼女は思いはじめてもいた。

「誤解なさっているようなので一応説明させていただきますとお、お宅のお嬢さんは自らこちらに飛んでらしたのですよ。まあ、うちのが覗き見していたのも悪いのですが、まさかあの法術不使用陣ガチガチバリバリの場所からこちらに飛んで来られるとは思ひもありませんでしたのですよ」

なのでこちらとしても困惑してるんですよおとににににににに。

喉元の短刀は全く無視である。

丁度その時、セルチエが開けた扉の向こうから子供の声が聞こえた。

マルーシャは短剣を放り出し、走りよって抱きかかえた。

「きり。きり。きり。きり。」

わが子を抱きむせび泣く母親とは対照的に赤ん坊のルーはセルチエの方にさかんに体を伸ばす。ともすれば母親の腕の中から落ちてしまいそうだ。困った母親が床におろすと、ものすごいスピードのはいいでセルチエの足にしがみついてよじ登ろうとした。

「おやまあ。えらく気に入られましたねえ」

非常に楽しそうにその光景を見ていたトコマは、マルーシャに先ほどの飲み物を勧めながらおもむろに床からソファアへ移動する。

「さあて、落ち着いたところでお話を伺いましょうか？」

にっこりに。

絵に描いたような笑顔だとセルチエは思った。

妊婦マルーシャはベラルーマ・ラクラスに名を連ねる者である。直訳するならば余りある者の集まりぐらいの意味だ。

この世では法術と呼ばれる不思議な力を使う者がまれに産まれる。当初は少数であった為に敬われたり追われたり虐げられたりしていたが数が増えるにつれ、その力を長期的かつ複数回にわたり利用しようとする者が現れ始めた。国家や権力者、お金持ち、お尻に火がついた人その他もろもろ。

相手が感謝し、それ以上関わりがなければよいのだが、寝首をかきにくるものが増えるにつれ、このままでは身がもたないと、不思議な力を使う者達が群れ集い、後に二つの組織が出来上がった。

ごくごく少数の、一人で生きる者達以外はどこらかの組織に属することになる。その一つがベラルーマ・ラクラスであった。もう一つの学び舎のような組織とは意を異にする。むしろ閉鎖的でその血を守ることに非常に過敏な一つの血族のような組織だという。

「老師ならご存知でしょうか、この私の存在と意味を」
年若く見えるトコマが老師という地位に席を置くことをせめて頭だけでも理解したいマルーシャはそう切り出した。

「はあ、まあ、なんとわなく？」

いつもと変わらぬ柔和な笑み。
セルチェはルーの相手をすることにしたらしい。頬をつつかれたルーが半拍おいて笑った。

「うーんと、ベラルーマ・ラクラスの人がどうして僕のところにな？
ベラルーマ・ラクラスともう一つの組織はごくごく消極的な繋がりしか持っていない。もう一つの組織出身のトコマはあまり詳しい内情は知らないはずだ。」

見目から同年代だと思われるトコマを、ベラルーマ・ラクラスで産

まれ育ったマルーシャは一度も見たことがなかった。

「どちらにも属さず、どちらにも通じる仕事を生業とされ、かつ最も力をお持ちなのは老師をおいて他に見つけることができなかつたからです。事実、この岩山を人力で登らねばならない状態を作れる程です。そのお力をお借りしたく参りました」

ようやく落ち着きを取り戻したマルーシャが言った。

彼女はベラルーマ・ラクラスの中でもかなりの唱法の使い手だ。その力は最上位といって差し支えない。その彼女ですらこの岩山一帯を取り巻く唱法には手も足もでなかった。

法術と呼ばれる物には2つの種類が存在する。ベラルーマ・ラクラスに属する者達が使う唱法と、対をなすも決して相容れぬラテリアに集う者達が使う刺術だ。

通常、どちらかの適正しか持てないのだが、稀にそのどちらをも扱える能力を持つものが現れ、その存在は奇跡を具現した者と呼ばれる。過去に遡ってもその数は五指に収まるといわれているが、彼女はその二つを扱うことができるため”奇跡のマルーシャ”と呼ばれていた。そのマルーシャですら、この小屋まで飛ぶことができなかった。未熟な刺術ならともかく、子供の頃から慣れ親しんだ唱法が、どうあがいても全く及ばないのは驚愕であり打ちのめされる事実だった。初めは唱法を使える誰かに力を借りたのかと思われたが、この地を守る唱法は強固であり、巨大にすぎた。これ程の唱法を唱えることができる者をマルーシャは知らなかった。ベラルーマ・ラクラスの誰もこれを壊すことはできないだろう。一人では。

ここにきてマルーシャは馬鹿げた噂を真実と認めるしかなかった。奇跡と呼ばれず自らをツアと名乗るトコマは、他人の法術を奪い己のモノとすることができるといふ。

「つまり、もう一人のお嬢さんを攫ったのはマルーシャさんでも手こずる相手、ということですね。ふむー」

ちっとも困っているようには見えないトコマはセルチェの方に向き

直った。

「さて、ここで問題です。どうしてルー嬢がここにいるのでしょうか？」

しばしの沈黙のあとセルチエが答える。

「岩山には老師の法術があるので歩いて登るしかありません。しかし私が覗き見をしたので結界に孔が空いてしまいました。その孔から私を目指してここに着地したのでその子は法術が使えます」

まずまずだったのだろうか。トコマが微笑む。

「はい、そこそこよくできました。ちなみにルー嬢のお年で法術をマトモに使える人はとつても少ないです。覚えておいて下さいねえ」
突如始まった講義は終わったようだ。トコマは指先で話の続きを促した。

「ご承知のように私はベラルーマ・ラクラスの中枢に位置します。

たしかに私は奇跡と呼ばれますが、現在妊娠中のために能力がかなり弱くなっています。なにぶん敵は多く、かつ双子の子供の内一人は捕らえられてしまい、太刀打ちできず……」

わざとらしくあれっ？と言いながらトコマが話の腰を折った。

「どうして子供ちゃんが捕まっているのにそんなに落ち着いてらっしゃるのですかあ？」

眉間に皺を寄せ、一瞬黙り込むマルーシャ。

「それは……相手が……敵対しているのが、私の父と夫だからです」

答えた声は苦しげだった。

「詳しく」

トコマが鋭く言い放つ。

「現在ベラルーマ・ラクラスの頭首は空位になっております。以前は私の姉が務めておりましたが、身罷りましたので、その座を埋める為の話し合いがもたれます。私が辞退、もしくは居なければ、子供のどちらかが就くことになりましたが、年齢的に後見が必要となります」

各人が秘伝の技を編み出す唱法使いの筆頭ともいうべき頭首は、代々ある一族から選出されている。その技数と力の強さは他の追隨を許さない。

「子供を思えば辞退しろってやつですね。わかりやすくヒドイなあ。先々代様とお母様は？」

「それが・・・先々代・・・いえ、祖母は、過日お出かけになられたままお帰りになられません。皆が探しておりますが行方がわかりません。母は・・・記憶にない頃に亡くなっております」

祖母は時々ふいつとどこかに出かけることがあった。そういうときは唱法でも行方が全く掴めなくなる。今回もそれなのか、それとも別の理由があるのか判断がつかなかった。

「しかしよく解らないですねえ。お父様も旦那様もあまりメリットがないような気がするですよ」

たしかにリスクにリターンが見合わない。それはマルーシヤも感じていたことだった。

「父は祖母とは血が繋がっておりません。力は強いのですが、技数の問題で、頭首になることは難しいでしょう。夫はラテリアの所属でした。私の”奇跡”の力に大変興味を持っています。・・・実は、奇跡は人為的に作れるのです。通常、奇跡は産まれながら持つものですが、我が血統の直系の双子に限り、何らかの事情で片方が欠するとその力は残りに移ります。その過程で何ゆえか、唱法と刺術のどちらもを使うことができるようになります」

これはベラルーマ・ラクラスでもごく一部の者しか知らぬ極秘事項だった。

「なるほど？」

にやり。どこか蔑んだような人の悪い笑みを浮かべトコマが言った。「ベラルーマ・ラクラスが奇跡を紐解いてまで私に望むものは？」先ほどから少しも笑っていないトコマの目を見据えてマルーシヤが言った。

「先ほど誓って頂いた通り、私のもう一人の子供、スーの奪還をお

願ひ致します」

肘を付き、組んだ手の上に顎を乗せたトコマは、口の端だけを歪めて言った。

「慈善運動はしていませんよ。それなりのものを頂戴しないと。ベラルーマ・ラクラスと対峙する為のものを、ねえ」

眼鏡越しの瞳は、夜よりも深く、混り気のない黒だった。

「貴女方親子の力を頂けませんかあ？」

それは法術使いとしての死を意味していた。

マルーシャは走った。世界でたった一人の双子の姉を求めて。姉、ルニーニヤの声を聞き逃した自分が腹立たしい。

いつ如何なるときでも聞こえるはずだった。

知っていたからこそルニーニヤは助けを求めていたのに。

自分への怒りと姉への焦りを乗せてマルーシャは駆ける。

街中で唱法を発動させることに何の躊躇いもせず只ひたすらに姉の声を追った。

着いた場所は悲惨な状態だった。

街の一角が崩れた土砂に飲み込まれようとして止まっていたのだ。

止めていたのは人々を守るための強固な結界と、少し離れた場所にいる姉自らへの脆いついたてのような力。

自らの安全を確保する間もなく、人々の結界を補強し続ける姉。

それでも土砂はどんどん積み、山そのものが結界の上まで崩れようとしている。

よかった、何とか間に合った。安堵しながら補強の詠唱を手伝う。

人と街の上に巨大な結界が築かれていく。

何とか助かったと気を抜いた瞬間、轟音と共に姉の真上に別の山が崩れてきた。

脆い力はそれごと押しつぶされた。

直前までこちらを見て微笑んでいた姉の代わりに土と岩しか見えなかった。

パニックになり詠唱するより先に叫んだ。

何をいったかは覚えていない。

だがひとしきり叫んだ後に気づくと泥だらけの姉が足元にいた。

誰かが刺術を使ったのかと思った。

が、そうではなかった。

使ったのは私だった。

今まで使えなかったのに。使おうとしたこともなかったのに。
辛うじて一命は取り留めた姉だったが、結局一度も意識が戻ることはなかった。

日々強まる私の刺術に、誰もか諦めを感じていた。

契約を交わした後、トコマはマルーシャのもう一人の娘スーを探すため自室に籠った。

人探しは時間のかかる唱法の部類に入る。

待つように言われたマルーシャは、ルーと客間らしき部屋で休んでいた。

法術以外はどのようにでも自由に使ってくださいと通された部屋は、その一室だけで小屋そのものよりも室内面積が広がった。

人の足では建築材料など到底運べないであろう険しい岩山。その上に鎮座する壊れかけの外観と手入れが行き届いた広大な内観を合わせ持つ小屋。どのような法術をも作用させることのない強大な力。

他人の法術を己の物にできるといふ見当もつかない力の使い方。

最初の誓いがなければツア・トコマはスーの奪還を承諾しなかったかもしれないとマルーシャは思い、詰めていた息を静かに吐いた。

これ程の力があるなら私なら、いや誰だって拠点に籠りきり研究に明け暮れるだろう。そして理を解き明かす為だけに生きる。

群れずとも己を守れるのならは他者や組織など煩わしいだけだ。と、そこまで考えて、マルーシャはふと文献の保管されている場のことを思い出した。

言語らしきものを唱え力を行使するのが唱法だが、一体何から得た力なのか未だ解っていない。

生命を害する言葉は見つかっておらず、行使した者が居なくても発動すること、数年単位に及ぶことも成し遂げられることから、自身の力ではなく何かから借りた力なのではないかと言われているが、解明には到っていない。

その言語らしき言葉は偶然の一致によって、少しずつ少しずつ蓄えられてきたものである。

身を守るなどの初歩的な言葉以外は、すべて各人の日々の研究によ

つて生み出され行使されており、例え同門だとしても教えを受けることはできなかった。

皆、生涯をかけた研究の成果を自分の子孫に残したいと思うのは当たり前前のことで、その成果は秘匿されるのが常だった。

だが、悲しいかな唱法使いは強ければ強いほど長く生き、そうなればなるほど子を生ずることが難しくなる。

そこで子を生さず、弟子も取らず亡くなったときには、ベラルーマ・ラクラスの全ての者に知識を開示することにした先達が居たらしい。もちろんそのまま誰にも知らせず亡くなる者もいたが、己の成果を残しそれによって己の生きた証としたい者のほうが多かった。

父や夫は、頭首でない彼等には、その成果を自由にする権利がなかった。

もしやその為に血や縁を裂いてまで頭首の座を求め、このような状況になってしまったのだろうか。

出口のない負の思考が頭を廻る。

「さてせるちえ君！ 旅には何が必要でしょうか！？」

突然バーンという音と共にトコマの寝室に続く分厚い扉が開いた。うとうとしていたルーがびくつと身震いする。

「食料と路銀と着替えだと思えます」

答えるセルチェには目もくれず、すたすたと戸棚まで歩くと石蜜を驚掴みにして、そのまま口の中に放り込んだ。

「シャしゃら ニアア ニアア ニ」

弟子へのあまりの態度に呆気にとられたマルーシャの腕の中でルーが目を覚ましセルチェへ言葉を発するが、口をぱくぱくさせるだけで続きの言葉が聞こえなくなった。

「声が出ていない？！」

批難するマルーシャの声に落ち着いたトコマの声が被さった。

「申し訳ない。お宅のお嬢さんはどうも危険に感じるのですが、あーえー、その唱法わ？」

眼鏡の奥が笑っていない。

何も唱えずに言葉を止めることは唱法には不可能だった。それは刺術の領域である。

何かを壊す以外の刺術の使い方をマルーシャは初めて目にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7594v/>

奇跡の使い手

2011年10月9日11時36分発行